農の風景ウェブ版

緑区でコメづくり

令和の米騒動

令和６年の夏は、悪条件が重なりコメ不足に陥った。一時的に、食品スーパーの棚からコメが消えた。その余波で、コメの価格は高値で推移し、農林水産省は備蓄米を放出することになった。本来ならば、悪天候などにより生産量が減少した際に備えたモノで、この放出は異例だ。

備蓄米って？

そもそも、国によるコメの備蓄は、「平成の米騒動」から始まった。火山の大噴火やエルニーニョ現象などが日本に冷夏をもたらした。平成5年のコメの生産量は平年の7割ほどしかなく、極端なコメ不足になった。当時は、長粒米と呼ばれるタイ米などを緊急輸入し、急場をしのいだ。コメではあるが、中粒米を好んで食べる日本人の味覚には合わなかった。ある程度の年齢以上の方なら、記憶にあるだろう。

緑区の水田は？

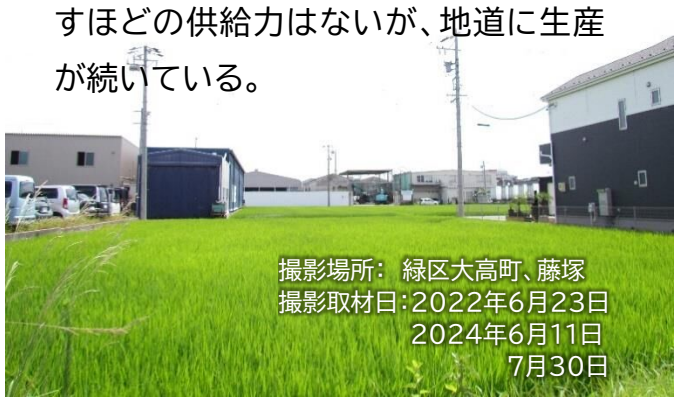
名古屋市内でコメどころと言えば、港区南陽。宮田用水が木曽川の良質な水を運び、江戸時代から新田開発が盛んに行われた。現在でも300ヘクタールの水田が広がっている。

それに対して、緑区は丘陵地が多い。それでも、かつては大高で新田開発が行われた。造り酒屋はそのなごり。

住宅や事業所が建ち並ぶようになったが、その合間に今でもわずかながら水田が残っている。

肥料をまいていた方に聞いてみると、「害虫は少ないよ。市街化が進んだおかげで、害虫が越冬する場所がないからかな」と言っていた。農薬をあまり使わなくても被害は少ないそうだ。市場を潤すほどの供給力はないが、地道に生産が続いている。

（注）取材させていただいたほ場では、一般の方の見学などは行っていません。



撮影場所：緑区大高町、藤塚
撮影取材日：2022年6月23日
2024年6月11日
7月30日